

「よき日のために」をめぐつて

泉 恵 機

「部落解放と浄土真宗」というテーマをめぐつて、明らかにされねばならぬ問題は多くあると思われるが、それらを大別すれば先づ次の二つの領域が考えられる。

① 真宗教学や教化、教団の組織、制度等における差別性の歴史に関わる領域

② 宗祖親鸞によって開頭された浄土真宗は、どのように人間解放の道を明示しているのかという真宗教学に関わる領域

この二つの領域は相矛盾しながら当然別な二つの事柄ではなく、①を明らかにする視点は②になければならず、②を明らかにすることが具体的な歴史社会の中で一つの力となって用くためには、①にまつわる諸相をたんねんになぞっていく必要があると思われる。

しかしながら、さらに、前述の②で明かされてくる浄土真宗が、現前に展開される部落解放運動と、どのように相関わりどのような交点をもつのか、という領域にまつわる事柄が明らかにされねばならないと思われる。

そのためには、現実には多様な形で展開されている部落解放運動の掘って立つ精神の根源に立ちかえり、それがどのような視座において人間を扱っているのか、どのように、//部落解放// //人間解放//を思想しているのかを見なければ

ばならぬと思われる。

このような視点から、部落解放運動を支える精神の一端を明らかにするために、部落解放運動の初発である全国水立の趣意書「よき日のために」を中心にとり上げ、さらに必要に応じて水平社の「宣言」にも触れていくことになるが、この二つはいずれも西光万吉によって草稿が作られたものである。むろんそれらは、他の同人たちとの論議から生み出された手が加えられたことも誤りのないことであろうが、この二つは、彼の自前の思想が表現せられたものであることは、「荊の冠り」「人間は尊敬す可きものだ」「業報に喘ぐ」「ビルリ王」等、他の論文や戯曲から見ても確かなことであると思われる。

その意味では、全国水平社創立の精神を「よき日のために」「宣言」を通して見ていくことは、当時の西光の思想を読みとっていくこととはほぼ重なってくるのである。それ故、論述中で水平社の思想というより西光万吉の思想として表現していると思われることがあるとしても故なしとしない。

尚「よき日のために」は「水平」第一巻第一号(世界文庫復刻版)所収のものを新漢字に改めて用い、「宣言」は「西光万吉著作集」第一巻(讀書房刊)所収のものをを用いることとする。

(一)

「よき日のために」は、水平社という、部落差別に対してラディカルな闘いを挑む組織への、部落大衆の結集を呼びかける「檄」の性格をもつものとしては、全体として、余りに多くの書物からの引用に満ち、文章のトーンは格調高いが余りに難解な言葉に満ちていると言わざるを得ない。

これについては、既に何人かの論者が触れているが、整理すれば①引用の多い点、②読者を混乱させる構成にな

っている点、③難解である点、の三つであろう。ここではこの三点について順に考えていく中で、「よき日のために」の思想とその周辺を考察したい。

先づ①にまつわって、所引の書物や思想家等を挙げれば、シラーの「歓喜に寄する賦」の一節、ウィリアム・モリス、佐野学「特殊部落民解放論」、ロマン・ロラン「民衆芸術論」、ゴッリキー「どん底」、新訳聖書、ギリシャ神話、親鸞という具合に多彩であり、量から言っても約三分の二が引用文であるが、これらについては、松岡保氏の研究^②に負うところが多い。

阪本清一郎氏は、

本文中には、ロシアのゴリキーや、フランスのロマン・ローラン、イギリスのウィリアム・モリスの文章や、またキリストの聖書、仏教の教典などからも引用されているが、それは単なる借り言葉ではなく、当時私たちに燃えていた部落解放の情熱を、たまたま先人の言葉によって表現したまでにすぎない。^③

と記しているが、確かに、他からの引用が多いからと言って、その思想が借りものであると言えぬことは当然である。阪本氏が前掲の文に続けて「行動をもって『よき日』の社会を実現せんとするやむにやまれぬ叫びであった」と言われるように、「よき日のために」は、引用文の余りの多さに関りなく、読む者の魂を揺さぶる力強さをもっている。それはそこに語られる志願の確かさ、深さと同時に、その思想が借り物ではなく、彼ら自身の「やむにやまれぬ叫び」であったことを証している。

②については、たとえば「よき日のために」の本文は(一)(二)に分けられているが、(一)は「解放の原則」と章題され、当時早稲田大学の教授であった佐野学の「特殊部落民解放論」の第四章「解放の原則」の全文がその全体を占める形になっている。そこには末尾に「佐野学」の名が付されるのみで、何一つ説明は加えられていない。(一)の終りまで来て漸く読者は、この(一)の全体が佐野のものであることが解るのである。

その(二)も同じく、冒頭からロマン・ロランの言葉で始まるが、これは内容についても些か読者を混乱させるのでないかと思われる。読者は、何故「民衆芸術」や「民衆劇」への参加が呼びかけられるのか、また何故に「ヨーロッパ各地に散らばっている数多くの努力を結合させて茲に民衆劇の建設を企てたいと思う」というような呼びかけが為されるのかわからぬままに漸く、「私共は此の民衆劇国際大会の開催を促す廻状草案を借りて、その民衆芸術をよき日にヨーロッパ各地を吾国の各地に民衆劇を水平社に取換へて貴意を得たいのであります」と言われて、うなづくことになるのである。同時に(二)は引用の文も含めてその文体は、(一)とも(三)とも大きく違っていて、ていねいに水平社創立への参加を慫慂する文体であることも注意せられることである。(三)に至れば、その文章は力強く、読む者の心を揺らし、書いた人の熱の直かに伝わる如き文体に大きく変化する。

これら読者を何らか混乱せしめる要素については、たとえ混乱を招くとしてもその各々にそれなりの理由のあることを筆者は感じているが、今は措く。むしろここで注目すべきことは、③の「難解である点」である。

(二)

「よき日のために」の(三)は、「吾等の中より」「運命」「無碍道」の三段に分けられているが、その中には「勦る」「プロキユストの鉄の寝床」「ゴルゴン」「インフェルノ」「バラヂン」「晨朝礼讃」など、一般的には難解、難読であると思われる言葉が次々に飛び出してくる。また全体として「なまなかの解釈は受けつけない」と評されることも肯われる難解さをもっていると思われる。

しかしここで注意を払いたいのは、この難解さにも拘らず、この文に触れた人びとにこの趣意書に流れる精神が、確かに伝わったのでなければ、創立総会に、当時三千人もの人びとがはるばると参集し来たことは解けないと思われることである。

確かにそこには、水平社の如き自立的な解放運動を生み出してくる歴史的條件が一方にあったことは誤りのないことであろう。水平社の発起人たち自体が佐野字によってそのことを言い当てられたのであり、それは「宣言」の中に「長い間虐められて来た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた吾等のための運動が、何らの有難い効果を齎らさなかった」ことを「事実」であると押え、それらの運動の質を「人間を勵るかの如き運動」であると見抜いて、そこから「吾等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集団運動を起せるは、寧ろ必然である。」と象徴的に謳われている事柄でもある。

しかしこのような質をもった運動創始の志願が、「よき日のために」をとおして、呼びかけをうけた被差別部落大衆に確かに伝わったと考えねば、水平社の創立を「必然である」として創立総会に多くの部落大衆が結集したことも解けないであろう。

今、*「確かに伝わった」*と述べたが、この創立趣意書を当時の被差別部落大衆——現在においても識字学級活動が必要であるような、永く教育を奪われた状態に押しこめられてきた被差別大衆が、少くとも知的に理解したとは考えられない。むしろ、知的理解よりもさらに深い理解がそこにあったと、私は考える。それと共に、相応に広汎な領域にわたる知識がなければ、知的には理解し得ないということは、起草者の西光万吉氏も、その内容の大方をこれでよしと認めた他の発起人たちも、よく解っていたのだと思われる。そうでなければ、もう少し平易なものを起草したであろうし、あるいは大幅な手直しが行われていたであろうと思われる。

確かに、「よき日のために」が大和同志会の機関紙「明治の光」の購読者リストを用いて全国に發送された時、「よき日のために」の解説書とも言うべき「一枚刷り」が添付されたと三浦参玄洞が記している。

しかし今から考えて見ると、「よき日のために」は水平社の創立趣意書としては決してまとまったものでなくその意章段も僅か四ページの「解放の原則」の外に、「吾等の中より」「運命」「無碍道」「夜明け」等の断片が付け

加えられてあり、全篇が懇く散文詩的であって、結社の方法さへはつきりと示されていなかった。それで印刷ができて上ってから俄かに思いついて、左のような一枚刷りを添付した。^④

「一枚刷り」の内容は、前述したごとく趣意書の解説の役目を果していると考えられる。しかし、解説は知的理解を手助けするものであり、その知的理解をおして求められていたのは、前述の、さらにより深い理解であり、創立同人の求めたものもそれであったと言ひ得る。このことは、「よき日のために」に格調高く表現された思想の質に関わることであるが、それは後述するところである。

それでは、//知的理解よりもさらに深い理解//が多くの被差別部落大衆において何故可能だったか、そして、西光氏らは何故可能だと考えたのであろうか。そこには「よき日のために」の思想に、被差別部落大衆のいわば人間そのものが反応し、そのよびかけに全身を以って呼応し得る共通の基盤があったと考えられる。そしてその共通の基盤とは、一言で言ってしまうえば「被差別の体験」である。

今、被差別の共通の体験と言ったが、それは「よき日のために」においては、「長い夜の憤怒と悲嘆と怨恨と呪詛と、やがて茫然の悪夢」と語られている。

彼らは、たとえば「穢多」と称ばれるその侮辱に対する「憤怒」を外に表現することを、永い間禁ぜられてきたと総体的には言ひ得る。近代に入ってから、多く日常の中では、その怒りを外に噴出させることは出来なかったであろう。出口を失った怒りは、圧倒的な差別を肯定する力にとりまかれる中で「悲嘆」となり、「悲嘆」はやがて「怨恨」や「呪詛」となる。

たとえば「水平」第一巻第一号の「全国水平社創立大会記」は、創立同人の一人である平野小剣の、創立大会での演説を伝えて次の如く言う。

……現今の社会は悪魔の社会であると鋭く抉り、自身の生ひ立ちを述べ母の臨終に及び、悲しい、痛ましい、母

の遺言は『世の中を呪へ』それであった。母は私に反逆児になれと云って死んだ。私は母の遺言通りに生きて行く、臨終の床の母の姿を想ひ起す時、私しの胸に反逆の炎は燃えさかる。私の生命は地獄の劫火を呼吸している。母の遺言が「世の中を呪へ」であったということは、何という悲しいことであろうか。遺言を聞いた子供は、日常的な差別の中で母の遺言を胸中深く着床させていったであろう。しかし、これはひとり平野小剣とその母親との間の事柄ではなく、無数の平野とその母たちが、「長い夜の憤怒と悲嘆と悲嘆と怨恨と呪詛」の中で生れ、生き、死んで行ったのだ。親から子に、子から孫にと蓄積されていった被差別者の「呪詛」の深さは、次のようにも語られている。

「穢多」の名に泣きて

秋村生

おのづから

すぎびゆくなれ

容れられぬ人の世なれば

にくき世なれば

太陽も

ほろべ人の世もほろべ

かくて我等も

ほろぶべきなり^⑥

ここには、世界（社会）に対する呪詛から自他の滅びを願う、いわば自棄へと傾斜していく被差別者の苦悩がリア

ルに表現されている。

このような苦悩の中に、己れ一人でなく父も母も祖父たちも、さらに全国の被差別部落大衆が呻吟しつつ生きてきたという共通の基盤に立ち、創立同人たちは、少くとも知的レヴェルにおける難解さを承知しながらも、自らの訴えるものが被差別部落の人々に確かに伝わる可能性を感じとっていたであろう。同時に、創立同人たちと共通の被差別の苦悩の中に生きていたからこそ、趣意書に触れた人びとが、その願いのもとに三千人も創立総会に結集したのだと言えよう。

(三)

(一)の冒頭で述べた「よき日のために」の性格の三点に従って考えてきた。ことに③について、知的理解の困難さにも拘らずそれをこえていわば真に理解しうる共通基盤として、被差別の体験とその苦悩を強調した。

しかしそれでは、被差別の体験を有たぬ者は、「よき日のために」を真に理解し、その願いに直参することは不可能であるのか、という問題が出てくる。それは逆から言えば、部落民としての差別を受けずに生きてきた者、つまり被差別の体験や苦悩を部落大衆と共有し得ぬ人間にとって、どのような場において、被差別者の苦悩の中から搾り出された「よき日のために」という思想を真に理解し、受けとめることが出来るのか、という問でもある。もしこの問を正面から考えていくことを避けるなら、部落民として差別を受けてきた者と受けて来なかった者が、真に緊密な人間の関係をもつことは出来ないばかりか、全国水平社創立の精神を受け継ごうとする部落解放運動と差別を受けてこなかった者の関係は、全く不毛な関係に陥らざるを得ないであろう。

この問題は、部落差別の問題を真向いになって受けとめていこうとする時、被差別者と差別を受けてこなかった者、差別する側に生きてきた者とが、どこで共通の場に立ち得るのかという非常に重要で、基本的な問題に直結している

が、今ここで、「よき日のために」において、被差別の体験がどのようなものとして自覚されているのか、を考察するところからこの問題を考えていきたい。

「よき日のために」の(三)の中の「無碍道」は次のように言われる。

吾々はゴルゴンに呪はれてゐたのだ、そして眼を閉じる事によってのみ生きて来たのだ、吾々は、耳を塞いで鈴を盗む者を笑へなかつた、しかし今時そんな事は、はやらない、土龍の勝利や蝙蝠の光栄は見たくもない。

吾々の見たいのは、永遠の昨日から亡霊の様に浮き上った今日の姿ではなく、しっかりと昨日を踏みしめて永遠の明日へ突進する勇しい今日の姿であるのだ、吾々は既に過去の穿鑿に倦きた、為たいのは未来の穿鑿だ。

前の方のみ見るがよい、全ては過ぎ去るのだ構ふものか恐れずに生きよ肝心なものはあったところのものでなく、あろうところのものだ——ロマン・ロオラン

吾々は大胆に前を見る、そこにはもうゴルゴンの影もない、水と火の二河のむこうによき日が照りかがやいている、そしてそこへ吾等の足下から素らしい道が通じてゐる。

水火を恐れぬ堅固なる信者よ、無碍の一道だ。

勇往邁進、寧ろ無謀に戦ふものの光栄を讚美せんかな、勇敢なる狂暴よ——是れ真に智者の生活なり——ゴー
リキイ

吾等の前に無碍道がある。

これは「無碍道」と題された節の全文であるが、ここで特に「ゴルゴン」が引かれてあることに注意したい。西光氏は、ギリシヤ神話に出てくるこの怪物の物語について、他の三つの論文「荊の冠り」「人間は尊敬す可きものだ」「業報に喘ぐ」にも引用している。

ギリシャ神話において、ゴルゴンは三つの別々な身体をもった怪物として語られ、そのうちの一つであるメドゥーサを英雄ペルセウスが殺すのであるが、メドゥーサの魔力の真髄は、彼女を見る者を石に化してしまおうところにあるという。

そこから見れば、「吾々はゴルゴンに呪はれてゐたのだ、そして眼を閉じる事によってのみ生きてきたのだ」という冒頭の下りは、石と化すことを恐れて、自ら被差別部落民として生れ、生きている、という事実に関心することによってのみ生きてきた、ということになる。しかし、眼を閉じることによってどのような生が与えられたか、それは真に生き生きとした生命をもたせられたか、少くともこの半世紀を振り返ってみるがよい、そして今日の「悲嘆と苦悩に疲れ果てて茫然としてゐる」自らの姿を見るがよい。石と化すことを恐れて眼を閉じて生きることは、結局は自他を冒瀆してきたことに他ならないではないか。換言すればこのように西光氏は訴えかけていると言えるだろう。

被差別部落に生れ、生きていくという事実を自覚することが「石に化す」と言われる程に強烈でまた重いものであると言われる言葉を聞いて、凝然せざるを得ないが、水平社創立の同人たちの訴えるものは、一たび石と化すこと、いかにそれが恐怖せられようと、その自身の事実を自覚することの他に、真に人間を輝かせて生きる道はないのだということであろう。被差別部落に生れたという事実が恐ろしいというより、その事実に関心して眼を閉じてそこから逃避することこそ真に恐怖すべきことであり、それは「茫然して」生きること、「運命を咥」きつつ生きることであり、そのような生き方を使喚して行く「親鸞の弟子なる宗教家?」によって誤られたる運命の概観、あるひは諦観^(マヤ)⑦に陥入ることだ、そしてそのような生き方こそ「吾々によって、又他の人々によって毎に人間を冒瀆され」て生きることに外ならないのだ。だから石と化すことを恐れるな、全存在を挙げてこの事実を引きうけることだ、「自らの人間を負う」ことだと呼びかける思想は余りに深い。

しかしながら、石と化すことを恐れ、眼を閉じ、自他を冒瀆して生きるという事実は、ひとり被差別者における事

実ではない。もし、「眼を閉じることによってのみ生きてきたのだ」という言葉の示すものが前述した如き、被差別者として在るということにおいてのみ言い得る事柄であるならば、被差別部落に生を享けなかったものはこの言葉で、「よき日のために」を真に理解し得ることはない。しかし、ここに示される事柄は、被差別者における事実であるとともに、人間における事実、人間という事実である。つねに自己関心において生き、自損々他しつつ生きる人間の事実が、そして、かかる自己の姿に眼を閉じたまま生き続けているという人間の事実が、幾百年部落民としての烙印を押しされて呻吟してきた人々によって抱えられたのだと言えるであろう。この趣意書を以って起ち上り、水平社の創立を宣言した人たちの精神が、部落解放からさらに人間そのものの解放への志願の表出であったと言われることの理由の一つはここにあるであろう。

「よき日のために」がこのような自覚に立って書かれている以上、被差別者が被差別の苦悩の中に見た人間の事実を、少くとも同じ深さにおいて見る者において初めて、「よき日のために」を理解し、その提起するものを受けとめ得る可能性をもつであろう。西光万吉氏は「龍魔界の苦患にも以て、自らの焔に焼けつつ自らを打つ形相こそ水平運動の真相であるのだ。」と水平社について語っているが、このような「自らを打つ」真摯さこそ、水平社の精神を理解することにおける必須条件であろう。

部落解放運動は今日に至るまで、水平社創立の精神を、多くの迂余曲折や様々な運動形態の推移にかかわらず伝統してきているが、それは、つねに自己関心において生きる人間のエゴイズムと、そのエゴイズムが歴史社会の中で組織化され、その組織化された中に無自覚に埋没して生きる者、即ち「眼を閉じることによってのみ生き」る者のあり方を、「差別糾弾」という形で批判するのである。しかしその「差別糾弾」は、西光氏の言う「自らを打つ」ことの上にはじめて成り立つものであって、それを捨てるならば部落解放運動は少くとも「人間解放」を叫ぶ根拠を失うのであり、同時にたとえば「糾弾」を受けるといふ形で部落解放運動に接する者においては、「自らを打つ」ことにお

いてのみ、「糾弾」の声を真に聞きとり、水平社創立の叫びを聞きとどけることが出来るであろう。

水平社の創立が「親鸞の同行」（『よき日のために』を名告るところから願い出されていることの内実の一端を述べた。水平社の創立については、その歴史的背景や多くの思想の影響が言われるが、その精神の根底が「真に親鸞の魂に燃えた信仰の焔」によって支えられていたことは、真宗信仰の浸透した被差別部落の一つの雰囲気や、創立者の中心メンバーの一人が浄土真宗の僧侶であったという如きことによっては説明し尽される事柄でないことは当然である。この水平社運動、部落解放運動と真宗との関わりについてさらに多くのことが考えられるが、別稿に譲りたい。

註

- ① 田宮裕三「西光万吉の水平社創のたたかい」、「部落解放」第一七九号所収、阪本清一郎「水平社創立の思い出」、「水平」復刻版「解説」、世界文庫刊、三浦参玄洞「水平社の思い出」、「水平運動論叢」所収、世界文庫刊、など。
- ② 松岡保「『よき日のために』（水平社創立趣意書）におけるロマン・ロランとボーリキー」、「関西大学部落問題研究室紀要」第十号所収。
- ③ 阪本清一郎「水平社創立の思い出」、「水平」復刻版「解説」、世界文庫刊。
- ④ 三浦参玄洞「水平社の思い出」、「水平運動論叢」所収、世界文庫刊。なお三浦は、水平社発祥の地である柏原北方の近在の浄土真宗本願寺派末寺誓願寺に養子として入寺し、創立同人ことに柏原の西光、阪本、駒井らの最もよき友人であり、理解者であったと言われているが、後に「中外日報」社に入り健筆をふるい、阪本をして、中外日報は水平社の「機関紙」のごときものと言わしめたほどであった。
- ⑤ この「一枚刷り」は、前掲の阪本、三浦の論文に収録されている。
- ⑥ 「水平」第一巻第一号所収、世界文庫刊。
- ⑦ 「よき日のために」(三)「運命」より。
- ⑧ 水平社「宣言」より。
- ⑨ 西光万吉「人間は尊敬す可きものだ」より。「水平」第一巻第二号所収、世界文庫刊。
- ⑩ 前に同じ。